広報誌「しちくほうかつ」2018年春号　Vol.16

しちくほうかつ

発行　京都市紫竹地域包括支援センター　TEL 495-6638
発行日　2018年1月吉日

内容

・特集 介護における人権についてみんなで考えよう…………1
・ここにこの人あり　地域の世話役さん登場 紫竹・待鳳学区…2
・地域の世話役さん大宮学区　ご長寿さん特集 ………………3
・「歯周病と糖尿病」歯科　研修会「新人事例検討会」…………4
・紫竹包括圏域徘徊模擬訓練　……………………………5
・福祉用具＆身体介護体験型学習会　……………………………6
・北区社協地域介護予防推進センターからのお知らせ ………7
・異動者のあいさつ　事業所移転　……………………………8

特集　「介護における人権についてみんなで考えよう」

平成29年9月21日にデイサービスセンター虹にて、紫竹地域包括圏域サービス事業所交流会が行われました。参加者は、ケアマネジャー、ヘルパー事業所、通所系サービス、福祉用具事業所、施設関係者、看護師、薬剤師のほか、行政より北区健康長寿福祉課、また、北医師会からは渡辺西賀茂診療所の渡辺康介先生も出席して頂き、総勢81名での交流会となりました。

近年、高齢者に対する虐待が家庭や介護施設などで表面化し、深刻な社会問題となっています。今回はこの虐待に焦点をあてて話し合いました。高齢者虐待は、認知症の有無など本人の判断能力のレベルによっては本人が自覚できなかったり、逆に本人の一方的な思い込みだったりする場合もあるため、判断が難しいケースもあります。虐待には多様な要因が複雑に関与しており、その解決は決して容易な事ではありません。

講演中の
花園大学
福富昌城教授

今回、講師に花園大学（社会福祉学部社会福祉学科）教授の福富昌城先生を迎え、ケアマネジャーからの「つなぎ服の着用は虐待になるの？」との提起を受けて、「何が起こり、なぜそのような事が起こっているのか？」、「もし自分の事業所がこのような事例の支援に加わるとすればどのように考えるのか？」、「仕方ない。しょうがない。」ではなく、チームで改善に向けて取り組みをしようと、それぞれ専門職の視点でグループディスカッションを行いました。

在宅介護や施設介護においても、故意に虐待(身体拘束)を行うのではなく、高齢者を危険から守ろうとした結果、傷つけてしまったというケースもあるでしょう。懸命にケアを行っているからこそ、追い詰められ、気づかないうちに不適切な行為に及んでいることがあります。このように善意ある介護をしていたにもかかわらず、認知症や様々な精神症状や言動によって疲弊した結果、虐待の加害者になる場合がある事を忘れてはなりません。それらの「善意ある介護者からの虐待」を避け、無意識の行動が取り返しのつかない結果にならないためにも、介護者である家族や介護職員も認知症の様々な症状によって傷ついている「もうひとりの被害者」と捉えた支援が求められるのでないでしょうか。

自分は関係ない、私の事業所は大丈夫と思わず、高齢者虐待への理解を深める努力を怠らない事が早期発見、早期対応につながると思います。ご本人やご家族が「不快に感じるケア」を行わないよう一人ひとりが心がけるとともに、事業所全体で取り組むことが大切であると考えます。

介護を受けるご本人やご家族が「どのように感じるのか」、また、自分が介護を受ける側であったら「どのようなケアをしてもらいたいか」、ご本人やご家族の心の声に耳を傾け、その気持ちやニーズを大切に受け止め、高齢者の自己決定を最大限に尊重した、ぬくもりのある質の高いケアをこの地域で目指していきましょう。

居宅介護支援事業所　春うらら　城 知孝

ここにこの人あり　地域の世話役さん登場

包括支援センターの専門職が地域の方にインタビューしています。

「日本一住みたいまち紫竹」の実現を目指して…
認知症サポーター養成講座の取り組みについて

紫竹学区　民生児童委員会長

十塚 裕章さん

聞き手　浪江　恵

今年度紫竹学区は、民生児童委員活性化推進事業(通称、モデル民児協)に指定されており、認知症の方への理解を深め学区全体で支えていくことを目標に、認知症サポーター養成講座(以下、認サポ)を2回開催しました。

1回目は9月16日、紫竹小学校や紫竹児童館に通う子ども達を対象に行いました。包括職員による認知症の話の後、民生委員さん達が認知症のおじいさんを主役にした寸劇を演じ、実際にどんな声かけや接し方が出来るのか、子ども達に考えてもらいました。しっかり勉強した後は、ピアノとヴァイオリンによるミニコンサートを楽しみました。

2回目は11月18日、紫竹学区全町の会長さん達を対象に行いました。こちらも包括職員による話の後、民生委員さんの寸劇で地域に起こりうる課題を観てもらい、地域で認知症の人に出会った時、自分は何ができるのか考えて頂きました。そして勉強後は、紫竹児童館の子ども達によるけん玉ダンスとプロのマジックショーを楽しみました。

2回の認サポを通じて、紫竹学区に住む子どもから大人まで、幅広く認知症について理解を深めることが出来ました。民生委員だけでは認知症の方を支えられません。住民全体で支え合う紫竹学区にすることが十塚さんの願いです。認サポを受講した人が身に付ける"オレンジリング"の輪をもっと広げて、日本一住みやすいまち紫竹を目指したいと仰っていました。

また、紫竹学区は3月に認知症の方への声かけ訓練を控えています。今回の2回に渡る認サポで学んだ知識が、きっと訓練でも役立つことと思います。

「老人福祉員の活動をはじめて」

待鳳学区　老人福祉員　**高本 聡子さん**

老人福祉員の仕事は、ひとり暮らしの方への訪問、声かけ活動を仕事のあいた時間に活動すればよいということでした。

私は母とは10歳のときに、父とは33歳のときに死別しており、唯一の介護経験が85歳の義父との一年間だけでした。そのため、活動していく自信がなく家族と相談し、承諾を得て老人福祉員の活動をはじめ5年になります。

研修会、運営推進会議、地域ケア会議等、百歳人口が6万7千人を越えて、学ぶべきことも多くあり可能な範囲で参加しています。自分の将来にも役立つと考えているからです。担当するなかには、風呂なし・呼び鈴なし・電話なし・トイレ共同アパートやオートロック未加入で町内会未加入、近所づきあいが希薄な方も多くあります。大きな家でヘルパーに掃除依頼されている方もおられます。

自宅訪問を好まない方も多いので、外で知っている顔をみかけたら笑顔で話しかけるように心がけています。冬場は帽子とマスク姿の方も多く、人違いをすることがありますが、口下手な私が笑って済ませる術を身につけました。女性限定ですが相手の方も嬉しそうにしてくださいます。

以前に、大学生との訪問アンケート調査をしたことがあるのですが、どの方も悲しいであろう戦争体験等を穏やかに話して下さいました。その方々も背中が丸くなり歩く速度が遅くなってくる、会話もかみ合わなくなる、何度も同じ話をされる、洋服が裏返しになっている等で認知症に気付けるようになりました。ご近所に徘徊を繰り返す女性がいて、現在は施設に入所されていますが病院の夫を見舞う目的で、歩き回っておられたようです。ご主人は亡くなられ、毎週土曜日になると親孝行な息子さんと自宅で過ごしておられます。

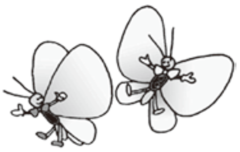
お一人おひとりにそれぞれの事情があります。私は地道に対話を続けて、人生の先輩方のお話をたくさん伺いたいと思います。

地域の力って

大宮社会福祉協議会副会長　伊部 幸雄さん

人と人とがつながり、誰もが大切にされる地域にと願いながら、日々の生活の忙しさの中で気がつけば自分の住んでいる近所の方でさえ、「名前ぐらいは知っているかな」というような地域のつながりが希薄になっている事が珍しくなく、返って当然のように日本のいたる所で聞こえてくる時代にあって、さて私の住んでいる大宮学区はどうなのかなと思っていた私でした。

そんな時ある方からその方の関わっている地域団体の手伝いをとの話をもらいました。その頃は40代で仕事もそれなりに忙しく、自分には無理かな、出来る事などあるかなと思いましたが、「一度顔を見せて」と言われ「では、とにかくに参加させてもらおう」との気持ちだけであまり難しく考えずに参加させて頂きました。その軽くてあまり深い思いや真面目な思いもなくスタートした私の地域活動でしたが、それからは定期的な会合、資料作り、関連行事の事前準備、また当日の運営などを何度もさせて頂くうちに地域の活動をされる皆さんの熱心な気持ちはもちろん、なにげない言葉や行動がどんどん自分の中へ浸み込んでいくようでした。何も大きな声で「地域活動は」と考えなくてもみなさんの中で時間を過ごすうちに、自然とその答えを見つけた、いえ貰えたと感じました。それからは自分の時間の可能な範囲で参加させてもらっています。



初めは「自分は地域に何が出来るか」と考えていましたが、時間が経過し今では関わる人それぞれの出来る事、できる時間を合わせた結果が、大きな実りとなることを日々感じています。そしてそれ以上に地域活動は、参加する全ての人が少しずつ少しずつ変わればきっと住んで良かったと感じられる地域になれる、地域の力ってこんなに大きくて、無限に有ることを改めて思い、支えるつもりが、支えられての20数年が有った毎日を実感しています。

地域の行事により、年齢層も乳幼児や小学生の子供さんから、100歳近くの方とお会いする事がありますが、それぞれとても良い笑顔を見せて貰えます。まさしくこれ以上のゴールはありません。地域の力って、これなんだと説明しなくてもその答えがそこにありました。これからも皆さんのその笑顔に支えられて地域活動に、ほんの少しでも支えるお手伝いを続けたく思います。

ご長寿さん特集

北原儀子さん

今回は「地域密着型総合ケアセンターきたおおじ」のサービス付き高齢者向け住宅の入居者である北原儀子さん(94)をご紹介します。

1923年3月19日、東京の浅草に生まれ、鳥取の境港で育たれました。女学校卒業後、1年たって17歳で旧満州に渡られ、南満州鉄道の総局旅客課の課長秘書として3年間ほど働かれます。当時の満州、大連やハルピンは様々な人種が集まる国際都市のようであり、日本からも当時の戦争思想から逃れてきた文化人(作家の佐多稲子、文芸評論家の尾崎秀樹など)や著名人が集まっていたということです。ご本人の年齢が17歳から3年間、そこでの経験が今でもご本人のキラキラとした思い出として残っている、とのことでした。

1942年に帰国され、境港の空襲で家族とともに疎開も経験されますが、戦後、22歳で鳥取から京都に移り、叔父が設立した「京都日日新聞」で経理を務められます。

当時、新聞社で知り合ったご主人と結婚し、退職、二人の子供にも恵まれます。しばらくは専業主婦の様な事をしながら過ごされますが、後に国の機関委任事務である「労働政策の基礎資料になる労働力調査」の調査員として30年間、働かれました。無作為に抽出した対象家庭を回り、家族構成や職業などアンケート調査する忍耐力のいる仕事でした。

そして1990年、ご本人67歳の時に学術、教育、農商工業など社会の各分野で功績を上げた人たちに贈られる「藍綬褒章」の一人に選ばれ、受章されます。「人と話すのが楽しい。」「自分の知らない世界を垣間見られて自分の人生に大変プラスになった。」と嬉々として働いておられました。

現在、北原さんは「きたおおじ」の小規模多機能の通いや訪問サービスを受けながら待鳳学区の住民として生活しておられます。その中できたおおじの職員はもちろんの事、見学に来られる学生や実習生、若い世代に当時のお話をして下さいます。「戦争は怖いわよ、いつのまにか周りみんながそんな雰囲気になっているの。」と当時の外国の様子や戦争の悲惨さ、それでも前向きに生きた当時の様子をまるで情景が浮かぶかのようにお話しして下さいます。 これからも若い世代に貴重なお話を聞かせて頂けたらと思っております。

きたおおじ　片山 大海

～歯周病と糖尿病～

紫野協立診療所歯科　所長　吉川恵造

最近平均寿命から健康寿命へといわれています。日本の健康長寿といえば「金は100歳、銀も100歳」でお馴染みの金さん銀さん姉妹です。今100以上の方を「センテナリアン」と呼ぶらしいです。日本、世界の100歳以上の人の調査で共通点が見つかったそうです。「慢性炎症反応が極端に少ないということです」。

では、慢性炎症をどう防ぐか、腸内細菌が最近クローズアップされ免疫にも大きく関与している腸内環境を整えて免疫力アップさせる。

昔の人は「病は気から」とよく言ったもので心の満足度も慢性炎症に関係していることが分かってきました。

最近炎症関連遺伝子群(CTRA遺伝子群)が見つかり、「生きがいを持つことや他人の事を考える幸せの方が身体の良い遺伝子構造をとる事が分かってきました。

糖尿病は色々な合併症をもたらし、体に色々な慢性炎症を引き起こします。最近糖尿病の第6の合併症に歯周病も入りました。歯周病は静かな病気と言われ、知らないうちに進行が進み歯が抜けていきます。歯周ポケットという言葉もよく聞かれると思います。慢性炎症によりポケット内に潰瘍面ができ、毛細血管からの出血した血液を栄養とし、歯周病菌は増殖し、バイオフィルムの病原性は高まります。慢性炎症を抑え、健康長寿の一歩を踏み出す為、医科・歯科への定期検診をお忘れなく！

最近は往診対応の歯科医院も増え、往診でできる治療の幅も広がっています。当院でも2年前より新しい機器を導入。この機械を使えば、訪問先でも診療室と同様の治療ができます。診療室との違いは椅子がないだけで、歯を削るタービン、水や唾液を吸い取るバキューム、洗ったり、風をかけたりする3wayシリンジ、歯石を取るスケーラーまで付いていて持ち運べます。今までは、掃除機を改造したり、あれこれ涙ぐましい知恵と努力を続けてきましたが、やっと快適に使える機械がやってきました。

歯科往診についての詳細はぜひお近くの歯科医院へお問合わせ下さい！

紫野協立診療所歯科は、診療所3Fです。

日常生活圏域支援事業所の取組み

平成２９年度
生活圏域居宅介護支援事業所研修会
第１回学習会　『新人事例検討会』

7月12日にサテライト今宮にて事例検討会が開催されました。今回は新人の方に事例を提供して頂き、参加者は3つのグループに分かれ、異なる3つの困難事例についてそれぞれ検討・意見交換を行いました。

「難病を抱えながら…」「精神疾患を抱えながら…」「出来ない事への葛藤を抱きながら…」どの事例も、ご本人らしさや希望・こだわりがあり、同時にそれを理解しながらも葛藤し向き合う難しさがありました。自分が、あるいは自分の周りの誰かがどの登場人物にもなり得る事例ばかりです。本人や家族の立場に立って、地域の一員として、ケアマネジャーとして、あらゆる視点であらゆる想いを話し合いました。

「本人の生きがいにつながる何かがあるのでは」「支える家族も含め全体を捉えていく必要がある」「本人の残存能力を信じて待つことも大切な視点では」等々、積極的に意見は飛び交い、1時間程のグループワークはあっという間に過ぎました。その後、各グループでの検討内容の発表・共有を行い、自身の業務を振り返りながら改めて“自分にない視点”に気付く事が出来ました。

検討会を終え、参加者からは「提供者は皆に意見、助言をもらえることで一人じゃない、仲間がいると思える。そんな良い点がある。今後もやって頂きたい」「一人で抱えて悩んでいることが多く、行き詰って困っている。皆で検討することで、いろんな視点で考える事ができ、突破口が見出せる場合がある」「今回は新人の方の事例発表でしたが、どの方もしっかりまじめに対応されておられ、反対に身の引き締まる思いを感じ、勉強になりました」等の声が挙がっていました。また、事例の提供者からも「いろいろな意見を頂き、救われたような気がしました。本当に発表させて頂いてよかったです」とのご意見も。

今回の検討会だけではなく、今後も他事業所と学びあい、協力しあい、連携を図っていければと思います。

日常生活圏域サービス事業所の取組み

第2回紫竹包括圏域徘徊模擬訓練

平成２９年３月４日、大宮学区にて第２回紫竹包括圏域徘徊模擬訓練を行いました。

平成28年の３月に行った第１回徘徊模擬訓練の経験を活かし、圏域の世話人で何度も話し合い、地域役員や行政の方々にもご協力頂き、無事に行うことができました。

今回の訓練には約６０名の方にご参加頂きました。

当日は大宮学区内にある西賀茂会館に集まり、訓練の概要の説明、声掛けの仕方の良い例・悪い例の寸劇を見た後、徘徊者役の方の顔写真や特徴を記載した行方不明高齢者発見協力依頼書を配布し、御薗橋商店街を中心とした４つのエリアに分かれ捜索を開始しました。

徘徊者役の方と同行者が２名１組で街を歩いて頂き、同行者が腕章を目印として付け、訓練中の気づきを記録。約１時間ほど捜索と声かけを行ったあと、西賀茂会館に戻り、１０グループに分かれグループワークと反省会を行いました。「声かけの仕方が難しかった」、「徘徊者役を増やしたおかげで声をかける回数が増えたので良かった」、「声をかけた後の終わり方がわからなかった」など、たくさんの意見が出ていました。また徘徊者役の方や同行者からも声を掛けられる側の意見や気づきなどもあり、非常に意義のある訓練になったのではないかと思います。

訓練後は、包括職員より、実際に行方不明が発生した時の情報発信までの流れなど、京都市の捜索の仕組みについて説明。また北警察生活安全課岡本係長より行方不明発生時の北警察署の動きと最近の動向について情報提供頂きました。

今回は御薗橋通りにあるお店の方々にもたくさんご協力頂きました。事前に承諾を取っていたとはいえ、営業中に店舗の中で訓練する際の注意点や課題も出てきました。今回の訓練で出た課題、準備や訓練の仕方などを今後に活かしていければと思います。

サービス付き高齢者住宅
ハイビスカス北山　山本圭介

徘徊者役と同行者が２名１組で街を歩く。

参加者は、それぞれ工夫をしながら声かけ。

約１時間ほど捜索と声かけを行う。

声をかける側、かけられる側
体験することでの学びを皆で共有。

日常生活圏域サービス事業所の取組み

2017年11月24日

福祉用具&身体介護体験型学習会

高齢者や障害者が自立した生活を送る上で福祉用具は欠かせないものとなり、広く普及していますが、一方で不適切な用具を使用すると逆に身体機能を低下させてしまう危険性もあります。そこで経験が浅い介護職でも「明日から使える介護実習」をテーマに紫竹圏域を中心とした現場の介護職と訪問系リハビリの職員と福祉用具事業所職員が一緒に学べる学習会を、北上在宅リハビリ連絡会との共催で行いました。

講師は京都市域地域リハビリテーション支援センターの理学療法士、清水真弓さんに依頼。学習会当日は福祉用具事業所さんに特殊寝台やエアマットなども実際に持ち込んで頂き、実演・解説付きの体験型の学習会を目指しました。

介護職とリハビリ職員とがペアを組んで、目を伏せたときに触れたときの感覚や立ち上がり介助の引っ張り方での感じ方の違いを体験し、自分が介護される側になった時の不安や立ち上がり難さを体験。参加者全員が実際にベッドに寝て身体にクッションを入れてみて不快なポジションやベッド操作の体験を行いました。介護の経験の少ない職員だけでなく、リハビリ職員からも「関節部分にクッションを入れると動きが制限されることに気がつかされた」との声も聞かれるなどリハビリ職員も改めて学習の機会になりました。

全体で41名(内リハビリ職員8名)の参加で介護職とリハビリ職員以外にも福祉用具の業者なども多数参加され、顔が見える関係づくりが出来て、利用者宅での連携や職種を越えた連携や相談もしやすくなることが期待されます。

身体介護の実習的な学習会は人気があり、全3回の学習会を予定しています。現場の介護職の皆さん、リハビリ職員と一緒に学べるチャンスです。ぜひ次回もお気軽にご参加下さい！

在宅ケアセンター新大宮　溝口 健次

ポジショニングクッションを使って、安楽な姿勢を実体験

地域のリハスタッフ8名がマンツーマンで実技指導

隙間を埋めると習ってきたけれどヒザの下ではなく、太ももの裏にクッション、この方が楽

体験したらわかる、良い感じ

****

この企画は3回シリーズで予定していますが、各回のみの参加も可能です。次回は5月頃を予定しています。日程が決まればまたご案内させて頂きます。

次回:『利用者・介護者にとって安全安心な移乗と移動～歩く・動く～』　使用機器:ベッド、車椅子、杖、歩行補助具

次々回:『腰痛予防にむけて身体の動きと自己改善～気付く・守る～』使用機器:リフト、スライディングボード・シート、ストレッチポール

京都市北区地域介護予防推進センター

新しい年を迎えられ、"今年も一年、健康に過ごせますように"と願われた方も多いのではないでしょうか。しかし、「歳だから」「億劫だから」「寒いから」と、身の回りのことや外出をする機会が減ってはいませんか？

活動的に過ごすことは、体や頭をたくさん使います。何もしなければ年齢とともに低下する心身の機能も、使うことで維持・向上されます。楽しく体を動かす、バランスのとれた食事を美味しく食べるなど、楽しみながら介護予防に取り組むことが心身の健康につながります。

当センターでは、運動・栄養・口腔・認知症予防などの教室や講演会を開催しています。気軽に参加でき、日々の生活にも取り入れていただけるよう、簡単な体操や脳トレ、食事の工夫、口腔ケアの方法などを紹介しています。お気軽に当センターまでお問い合わせいただき、ぜひ一度ご参加ください。

<お問い合わせ>京都市北区地域介護予防推進センター
TEL 075-494-0323

参加費無料・申込み不要・どなたでも参加していただけます

北区地域支え合い活動創出事業が始まっています！

京都市社会福祉協議会

京都市では、平成28年5月から京都市社会福祉協議会が事業を受託し、「地域支え合い活動創出コーディネーター」の配置や「地域支え合い活動調整会議」の開催を通じて、地域の住民団体、ボランティア団体や民間企業等の多様な主体が生活支援サービスを提供することで多様な生活支援ニーズに応える体制づくりをすすめています。今回は、北区のコーディネーターの取り組みの一部を紹介します。

1．居場所情報交換会
～北区の認知症カフェ交流会の実施～

「認知症かな？」「最近物忘れがひどくなってきたな。」など、悩みのある方やご家族の方が安心して集える認知症カフェが北区内に5ヶ所オープンしています。今回は、それぞれのカフェの取り組みを紹介していただき、カフェ運営者と住民が一緒に「手伝えること」「手伝ってほしいこと」について話し合う時間を持ちました。

交流会を通して、自分の地域にも認知症カフェがあればいいのにという声もあり、北区の認知症カフェ見学会をしてほしいなど、積極的に関わっていただける姿が見えました。

2．北区地域支え合い活動入門講座

高齢者の介護予防とこれまでの経験が活かせる社会参加の機会の場づくりや高齢者をはじめとした住民が、身近な地域での助け合い活動を創りだすためのきっかけづくりの機会として実施しています。高齢者をはじめ，興味関心のある方，どなたでもお気軽にご参加ください。

◆日時：平成30年2月7日（水）　午前10時～12時
◆会場：京都市北老人福祉センター（北図書館の上）
◆費用：無料
◆講座の主な内容：高齢者を取り巻く状況と身体と心、暮らしを知る、高齢者を支援するボランティア活動　他
◆問合：北区地域支え合い活動創出コーディネーター
京都市北区小山上総町３（北区社会福祉協議会）
TEL441-1900／FAX 441-8941
メール　info@kitaku-syakyo-kyoyo.jp

異動者のあいさつ

よろしくお願い致します

ご挨拶は少し早めですが3月から地域包括支援センターでお世話になる竹村順子です。同法人の居宅介護支援事業所から異動になります。在宅の仕事は大好きです。これからも地域の皆様・事業所の皆様、ご指導のほどよろしくお願い致します。

看護師　竹村 順子

ケアマネジャーとして10年以上経ちますが初めて地域包括支援センターで仕事をさせていただくことになりました。新しい分野で不安な思いもありますが、心機一転仕事をして行きたいと思っています。今まで学んできた事を活かしながら、また新しい経験を学びながら利用者さんや地域の方々へ還元できればと考えています。不慣れなことから御迷惑をおかけすることもあるかも知れませんがよろしくお願い致します。

ケアマネジャー　大倉 宗一郎

お世話になりました

3月より居宅へ異動することとなりましたので、この場を借りて皆さまにご挨拶をさせて頂きます。

2013年9月に診療所から包括へ異動になり、気がつけば4年以上が経ちましたが、本当にあっという間の日々でした。地域の皆さん、事業所の皆さんのおかげで何とかここまでやってこれました。たくさんご迷惑もかけたと思うし大変なことも多かったですが、包括の醍醐味をたっぷり味わい視野もずいぶん広がった気がしています。居宅を経験してもう少しバージョンアップする予定です！今後もよろしくお願いします。

社会福祉士　山田 沙希

お世話になりました

「縁側」という言葉を聞いて、あなたはどんなイメージを思い描きますか？かつては都市にも田舎にも、気軽に腰掛けたり、作業をしたり、人々が談笑する「縁側」があり、近所の方との気軽な交流が当たり前の風景でした。しかし、新しく出来る住まいから「縁側」は消え、井戸端会議というコミュニケーションも、以前ほどは見かけなくなってきているのではないでしょうか。人と人とのふれあいが希薄になると、地域の人間関係もキシみ始め、子供にも高齢者にも生きにくい状況を生み出してしまいます。

約6年間、地域包括支援センターで働いて感じたことは、繋がり合うことの大切さです。時代の移り変わりにより、日本の文化は少しずつ変化していきますが、人と人とが繋がりあうことの大切さは今も昔も変わりません。

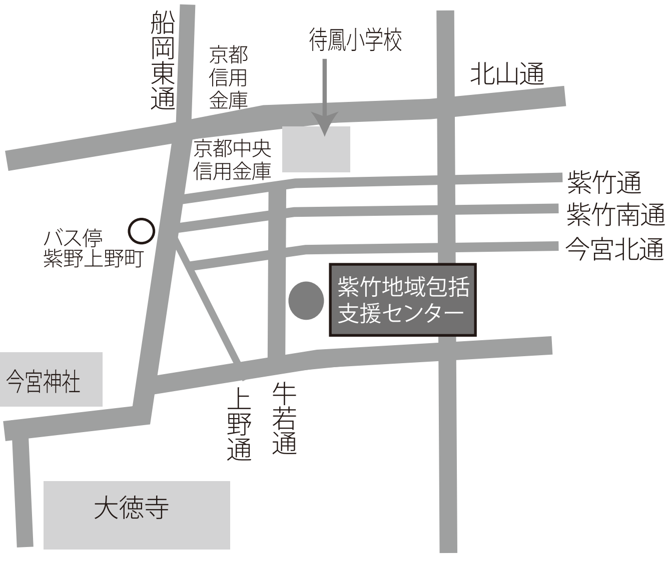
これからも地域の人々が談笑したり、ふれあったりする・・・そんな「縁側」で行われていたような気軽なコミュニケーションが図れる住みよい町づくりを居宅介護支援事業所に異動してからも何らかの形でサポートしていきたいと思います。色々とお世話になりました。これからもよろしくお願い致します。

ケアマネジャー　渡邉 泰三

事業所移転しました

1Fたいほうサロン

たいほう外観



高齢サポート・紫竹
京都市紫竹地域包括支援センター

当センター担当地域
紫竹学区・大宮学区・待鳳学区

高齢サポート・紫竹は、大宮・紫竹・待鳳地域の高齢者の方々の相談窓口です。

〒603-8206 京都市北区紫竹西南町65−34
TEL 495-6638　FAX 495-6660

URL: http://kita-hp.aoikai.net/sien.php
E-mail: shitiku@mbr.nifty.com